No.85
2021. 3.10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■私たちの支援は今も息づいている(ネパール) 1,2
■「多文化共生の地域づくり」オンライン連続講座 3
■支援地から(ラオス) 4,5
■支援地から(カンボジア) 5
■出前講座(真光寺中学校)／気仙沼だより 6
■コラム 活動と運営の「オンライン化」進む／地球の木と私 7
■インフォメーション／活動日誌 8
■編集後記 8

私たちの支援は今も息づいている
―コロナ禍の予期せぬ出来事―

コロナ禍で辛い思いをしていらっしゃる方々に心からのお見舞いを申し上げます。また、私たちの日常を支えるために危険と隣り合わせで仕事を続けて下さっている方々に感謝を捧げます。

容易に収束しそうにないパンデミックの中、地球の木も可能な範囲で業務をリモートに切り替える、講座をオンラインで行うなど、新たなチャレンジをしています。何よりも話し合いを大切に活動してきた私たちにとって、対面で会えないことはストレスも大きかったのですが、最近ではZoomミーティングにも大分慣れてきました。コロナの影響で恒例のイベントが中止になったり、対面のクラフト販売ができなくなったりなど、失うものが多かった一方、これまで想像もしなかったような展開もありました。

from Nepal

■出前講座がきっかけで

4ヵ月以上も延期になった出前講座の準備をしていた時、「ネパール教育プロジェクト」(現在の「幸せ分かち合いムーブメント」の前のプログラム。1997年から2009年にカイラリ郡で実施)の情報を刷新した方がいいという意見が出ました。元パートナーNGO・SOARSのニルマラK.C.さんに連絡をとり、昨今の村の様子を尋ねると、「それなら、ジュムでカイラリの人たちとミーティングをしましょう」と言います。「ジュムって何？」とポカンとしていると、「今ミーティングは皆ジュムよ」とニルマラさん。ネパールでもデジタル化が進んで、Zoomミーティングが当たり前になっていたのです。

■懐かしい顔、顔、顔

それにしても、カイラリ郡は辺境の地。本当に実現できるのか心配していましたが、1週間後、パソコンの画面にはカイラリのキーパーソンたち4名、通訳のニルマラさん、SOARS顧問のシュレスタ教授、それに地球の木の参加者5名の顔が映し出されました。紙芝居「デブラニものがたり」の主人公で、識字教室の生徒から先生になったデブラニさんは、すっかり貫禄のあるマダムに(写真の下段中央)。起業してヤギや豚を育てるセンターを作ろうとしています。「夫の名前ではなく自分の名前で政府に登録します。これはとても画期的なことなのです！」と誇らしそうです。識字教室の生徒たちの憧れだったデブラニさんですが、現在は村の女性たちにソーシャルビジネスへの道を拓くロールモデルのような存在です。村には裁縫や編み物などの店を始めた女性、幼稚園で子どもたちの能力開発に携わっている女性もいるそうです。

Zoomミーティングの画像

■発行 特定非営利活動法人 地球の木 理事会 ■発行責任者 磯野昌子 ■編集 会報作成チーム ■事務局 〒231-0032 横浜市中区不老町1-3-3フェニックス関内2F
■TEL 045-228-1575 ■FAX 045-228-1578 ■E-Mail:chikyunoki@e-tree.jp ■http://e-tree.jp/

■学んだことを行動に

デブラニさんの先生であり、当時から行動派の女性リーダーだったラクシュミさんも、起業して食品店を経営しつつ協同組合の代表をしています。協同組合の組合員は1,358名。うち女性は674名。女性の活動に焦点を当てています。地域にできた5つの協同組合のうち4つは、識字教室の卒業生が作りました。識字の勉強と同時に始めた貯蓄グループは今も活発に活動を続けており、女性たちは貯蓄グループか協同組合に参加しながら自発的に地域に貢献していることが分かりました。13年の間に81クラスの識字教室、その他、貯蓄、女性起業家育成、協同組合づくりなど、持続可能な開発のための多岐にわたるトレーニングを受けた人々が学んだことを行動に移していることが分かりました。

■就学率が上昇

女性たちの活躍もさることながら、地球の木とSOARSが力を入れて取り組んだ教育の分野でも大きな進展がありました。「男女を問わず、殆どの子どもたちが学校に行っており、教育の大切さを皆が理解しています」という言葉に、私たちの支援が今なお息づいていることを知りました。高校や大学、大学院に進学し、望む職業についた若者たちの話も出ました。

■小学校がブレイク！

2008年の最終調査の時、アメリカのNGOの支援で見違えるほどモダンな校舎に生まれ変わっていたシセイヤ村の小学校が、今、衆目を集めており、私学から転校してくる生徒もいると言います。この小学校は、1998年に初めて訪問した時、丸太の壁の隙間から向こう側にいる牛が見え、かやぶきの屋根から蛇が落ちてくるオンボロ校舎で、生徒の大半は、地主に隷属して働く「ボンデッド・レイバラー」（農奴）の子どもたちで裸足でした。

先生に給料が払えないというので、政府の認可が取れるまで2人分の給料を4年間支援しました。保護者達は校舎の建設を望んでいましたが、地球の木とSOARSが提供したのは、学校運営や助成金申請書の書き方などのトレーニングでした。魚を与えずに魚の釣り方を教えた一例でしょうか。

■支援から交流に

かくして、まさかZoomで再会するとは夢にも思っていなかった極西部のキーパーソンたちとのミーティングが二重通訳の力を借りて実現しました。終了時間になっても皆、名残惜しそうに退出しません。きっとカイラリの友人たちも、何日か再会の喜びの余韻に浸っていたことでしょう。

■リソースセンターが女性解放運動の拠点に

SOARSの仲間たちとは、支援終了後も交流が続いています。地球の木が建設費の一部を支援した「リソースセンター」が女性のエンパワメント研修などに利用されてきたことは見聞きしていましたが、この度のやり取りを通して新情報を得ることができました。ニルマラさんが「ソーシャルワーカー・オーガニゼーション・グループ」の事務局長を務めていること。そして、リソースセンターに事務所が置かれていることです。ニルマラさんは、アクションエイド・ネパールの代表など多岐にわたる国際NGO活動に関りながら、現在は「ワン・ビリオン・ライジング」（One Billion Rising）という女性解放のための活動を進めています。これは、地域にガーデニングや野菜作りを広める中で、男性も活動に巻き込み、母なる大地の大切さ、有機農業の重要性だけでなく、女性の仕事への理解を深める活動で、暴力や女性差別をなくす流れを作ろうとしています。いつものことながら、ネパールから学ぶこと大です。

（ネパールチーム　乳井 京子）

One Billion Risingのメンバー

ニルマラさんからのメッセージ

ニルマラさん

～変革は世代をまたいで～

私たちの支援は、社会経済面、教育や女性の暮らしに大きな影響を与えました。人々と人々の繋がりから大きな変化が起こります。これはプロジェクトではなく、volunteer mission、つまり、ボランティアたちが使命感をもって行動しているのです。だから、資金援助を受けていても、受けていなくても継続するムーブメントなのです。私たちがカイラリから撤退して11年が経ちますが、人々はまだ地球の木とSOARSのことを覚えています。そして、私たちのミッションのとおりに物事を進めています。この変革は世代をまたいで続いています。本当にありがとう。私たちは良い活動をしてモデルを作ったのです。人々の発展のための道筋を作ったのです。

「多文化共生の地域づくり」オンライン連続講座

ウンジュさんに聞いてみよう！ ～在日コリアンとして生きる～

第3回目は、在日コリアン3世の金銀珠(きんうんじゅ)さんをお迎えしました。多文化共生社会を考えるために、戦前から日本に暮らしている在日韓国・朝鮮人の方々について、もっと知ることが大事と考え、企画しました。神奈川県に住む在日韓国・朝鮮人の数は約3万人。約7万3千人の中国人に次いで第2位です。

ウンジュさん(Zoom画像から)

金銀珠さんのご祖父母は朝鮮半島で生まれ育ち、日本へ渡ってきました。国籍は朝鮮籍です。朝鮮というと北朝鮮と思う人もいますが、「朝鮮」とは分断される前の北も南も合わせた朝鮮半島を指しています。1965年に韓国と日本の国交が回復し、在日朝鮮人の人たちは韓国籍を選べるようになりました。韓国籍を選んだ人は韓国の国籍を持ち、在日韓国人と呼ばれます。また、選ばなかった人は無国籍で、在日朝鮮人のままの呼称となります。

横浜生まれ、横浜育ちで、幼稚園から高校までは神奈川県の朝鮮学校で、その後は小平市にある朝鮮大学校で学びました。日本の植民地時代、朝鮮人は日本の同化・皇民化政策の下、朝鮮語での教育や民族教育を禁止されていました。戦後、子どもたちが帰国した時のために、同胞の人たちの努力によって国語講習所が日本各地で開かれました。これが朝鮮学校の始まりです。1947年の時点で、全国で初等学校541校、中等学校7校もの学校がありました。現在神奈川県には5つの学校があり、生徒の国籍は朝鮮、韓国、日本などです。生徒数は減って333人(2019年現在)。補助金の停止、そして高校無償化や幼児教育・保育の無償化の対象から除外されていることも大きく影響しています。

朝鮮学校での生活は同胞のクラスメートと一緒に勉強し、とても楽しく充実したものだったそうです。部活動は民族楽器部で、「ソヘグム」という、中国の「二胡」に似た弦楽器を弾いていました。今も結婚式などに呼ばれて演奏することがあるそうです。そんな銀珠さんは、中学生の時にアイデンティティについて悩んだそうです。母語が日本語で母国語は朝鮮語であるという矛盾も感じました。朝鮮人であることを否定的に考え、隠したり、通名を使ってみたり、日本人だったらもっと可能性が広がるのにと考えたこともありました。しかし、同じルーツを持つ友達との繋がりや、民族教育により、自分を肯定的に捉えることができました。

朝鮮大学校に進むことを決めたのも、同じ仲間ともっと一緒に過ごし、自分のルーツと向き合い、人間力をつけたいという思いからでした。大学では外国語学部日本語言語学を専攻しました。その時に『日本語 表と裏』(森本哲郎著)という本を読み、日本語の持つ奥深さに気づいたことで、日本という国と日本の人たちに対する見方が大きく変わるきっかけとなりました。

卒業後は朝鮮青年同盟の専任職員として、若者たちが朝鮮人として堂々と生きていけるようなサポートをする活動に専念しました。これを通じて「あーすフェスタかながわ」や「ユースフェスタ」に関わり、日本の人たちと一緒に活動する機会を得ました。そこで、在日コリアンについてよりよく理解しようとし、歩み寄る人たちに出会い、考えが変わっていきました。

左から準備会の大嶋さん、ウンジュさん、筆者(事務所で)

このような銀珠さんの話を聞いた参加者はどのように感じたのでしょうか？感想をいくつか紹介しましょう。

- 日韓関係が思わしくない近頃ですが、民間で理解して交流していくことが大事と再確認しました。
- 多文化共生というと新たに来日する外国の方に目が行きがちですが、もっと近くを見なくてはいけないと思います。
- 朝鮮語や母国の文化を追求するうちに日本語の独自性に魅せられたという金銀珠さんの、『おぼろの美学』など日本語に対する指摘、あーすフェスタに関わる中での内面の変化が興味深かった。
- 率直に語るウンジュさんにとても好感がもてました。私たちの世代も、先入観なしに率直に話し合ったりしていくことが大切だなと思いました。

このような感想を読んで、歴史をきちんと学び、出会いの場を作ることの大切さを改めて感じました。

(多文化共生の地域づくり準備会　丸谷 士都子)

「9ヵ月ぶりにラオスに戻って」

～日本国際ボランティアセンター（JVC）現地代表の岩田健太郎さんにリモートインタビュー～

ラオス・サワンナケートの現地事務所に戻って2ヵ月が経ったという岩田さんに、ラオスの街や村がコロナ禍でどんな様子なのか、またプロジェクトの進捗状況について話を聞きました。

JVCの岩田さん

入国から現地事務所まで

長い手続きを経てやっと入国が許可され、ビエンチャン空港に降り立ったのは昨年の11月19日でした。政府のバスで指定のホテルに送られ、そこに2週間滞在しました。外出は許されず毎日の検温。ちょっと驚いたのは、ラオスでもウーバーイーツのような「フードパンダ」というデリバリーサービスが普及していたこと。そんなのも時々利用しつつ、窓のない部屋で辛抱しました。やっと解放され、街に出て、ラオスに帰って来たことを実感。リモートワークでやり取りしていたとはいえ、現地スタッフと再会できた時には大いにホッとしました。

街の様子、村の様子

サワンナケートの街は前とほとんど変わりないですね。通りは夜遅くまで賑わい、マスクをしている人もそう多くないです。村の方はどうかというと、実は、私はまだ村に行けていません。溜まってしまった事務仕事に追われているのと、やはり村に外国人が入るのを行政が恐れていることもありまして。ラオス人スタッフの話によると、海外の出稼ぎから帰って来た村の若者たちが、地方に仕事先を見つけて出かけて行くとのことです。中国とラオスの間に進んでいる鉄道の建設工事などですね。もう一つ面白い話は、北部の村の若者たちの間でサソリを捕まえてベトナム人の仲買を通し中国人に売る、という仕事が流行っているそうです。食料になのか、漢方薬になのか分かりませんが。

これからの懸念は？

ラオス国内の感染者は1月25日で44名、死亡はゼロです。タイやベトナムに比べてもかなり少ない。元々が一党独裁の国ですから、国境を封鎖し、更に感染者が出るとその地域をすぐロックダウンするなど徹底した対応策を講じる。しかし市民生活への保障などはなく、その不満も強権で抑え込んでしまう。経済と感染抑止策の間で揺れ動く日本とは大違いです。しかし物流が滞り物価は上がっている。観光業への打撃も日本の比ではなく、近年の5～6%の成長率もマイナスに転じる見通しです。最近、ラオスでは初めてという高速道路ができたそうですが、中国の投融資も増えるばかりで、政府の債務危機が懸念されています。国の経済を支える一方で、農村部住民の自然を基盤にした暮らしに影響を与える大規模開発プロジェクト。これから一層それらが進められるのではないかと心配です。

プロジェクトの見通し

サワンナケート県下2郡の10村を対象に活動を進めてきましたが、2021年3月の終了予定が半年程遅れる見込みです。コロナの影響でスケジュールの遅れは避けられず「やってきた活動を村にしっかり定着させていくためのフォローアップ、またそれを現地行政に引き継いでいく」ということを考えるともう少し時間がかかりそうなのです。

これまで、村人たちが自分たちの力で安定した暮らしができるよう、稲作技術の改善、牛銀行やヤギ銀行、キノコやラタンの栽培技術研修、コミュニティ林や魚保護地区の設置などの活動を進めてきました。JVCが去った後でも、村人たちが自分たちだけで続けていけるよう道筋をつけ、現地行政にもそのフォローアップを引き継ぎたい。出来れば覚書を作って郡庁に定期的に聞く、ということもやりたいと思っています。

ペットボトルのようなものに稲藁を詰めてのキノコ栽培
（ナライコーク村）

JVCラオスの活動をSDGsに照らし合わせると

国連が掲げる「持続可能な開発目標：SDGs」の17のゴールの内、JVCラオスの活動目標は以下4つに当てはまります。

①「貧困をなくそう」貧困層や弱い立場にある人々が経済的資源に対する平等の権利が持てるようにする
②「飢餓をゼロに」食料の安定確保と持続可能な農業の推進
③「ジェンダー平等を実現しよう」家族の中での役割分担や意思決定への女性参加
⑮「陸の豊かさも守ろう」森林の保全、生物多様性の保護

（会報作成チーム　斎藤 和子）

カンボジア女性緊急救援センターからの報告

こんな水際対策も

カンボジアでは相変わらずコロナ感染者は少数で死者はいまだにゼロ（カンボジア保健省発表）。これは厳しい水際対策による成果でもあると思います。

最近カンボジアに戻った他のNGOのスタッフの報告だと、空港で日本でのPCR検査の結果を提出すると共にデポジットとして2,000ドル（約21万円）を払い、政府指定のホテルに直行、完全隔離に。2週間一切出られず、食事は部屋の外に置かれていて、その間2回のPCR検査。つまり2,000ドルはその間の費用で、残れば返してくれるそうですが、どう見てもカンボジアの価格では考えられないほど高額です。

自立の助けに

さて支援先のカンボジア女性緊急救援センター（以下CWCC）から報告が届きました。2020年は地球の木からの支援金で、自立するための支度として14名に当座の米、台所用品、自転車等の費用を、また3名には仕事を始めるための資金として、野菜の種や縫製のための布、引き売り用の台車（scrap cart）の費用を支援したとの事です。その他シェルター内の日常生活のための食糧や医薬品、職業訓練などに使われました。

CWCCで自立のために縫製技術を学ぶ

少女たちの近況

今までお知らせしたシェルターを出て自立した少女たちがコロナ禍で、どんな生活をしているのか聞いてみました。

- ヤギを飼い野菜を育て売っていた少女は、コロナ禍で野菜が売れなくなり、母親の故郷に帰りました。
- 漬物を売って生活していた少女も仕事が減ったうえ、漬物を作る機械を盗まれました。しかしCWCCの呼びかけで近隣住民から支援を受け機械を購入でき、仕事を再開。学校へも通い、お金の管理もできて安定した生活を送っています。
- 私たちが訪問した時にマフィンを焼いてくれた少女は、その後自宅に帰り、家事をはじめいろいろなことに積極的に取り組んでいます。

見守りを続ける

コロナ禍の中、シェルターを出た少女たちが生きて行くのは厳しいですが、CWCCは自立後もフォローアップを欠かさず（今は訪問が難しいので電話などによることが多いそうです）、彼女たちを見守り続けています。それが再びシェルターに戻ることなく、自立の道を歩んでいけることに繋がっているのだと思います。しかし、社会全体としては、コロナで仕事を失った男性たちがストレスのはけ口としてDVや性犯罪を起こす事例が増えているとの事です。これはカンボジアだけの問題ではないと思います。　（カンボジアチーム　成瀬 悦子）

ラオスに暮らし ② ラオスで食べる

JVCラオス事務所に赴任した夫君に同行してサワンナケートで暮らしている筆者、ラオスでの食料事情をつづります。

前号では野菜と加工品についてお話しましたが、つづいては、お肉。日本のようにパック詰めされた肉はありませんので、鶏肉は1羽単位で、豚肉や牛肉はブロック状に切り分けられたものをキロ単位で購入します。ブロック肉はカットし易いように一度冷凍した後、半解凍の状態でスライスすれば薄切り肉、さらにこれを包丁で叩けばひき肉の出来上がり。この際、丸太を輪切りにしたラオスのまな板が大活躍します。ラオス人があまり食べる習慣のないハムやベーコンは手に入りにくいので、月に一度、豚肉を塩漬けにしてベーコンを自作しています。ベーコン作りに使用する手作り燻製機には、ラオスではお馴染みのもち米を蒸す目の細かい竹かごが欠かせません。

魚介類は、メコン川で獲れた川魚がメインです。こちらもキロ単位で、大きな魚の場合はぶつ切りにされたものを購入します。毎週のように買うのはティラピア。淡白なので和洋中どんな料理にも合います。このほか、川海老やししみもよく買うものの一つ。川海老はかき揚げで楽しんだ後、残りは茹でてから天日干しにすれば干し桜海老の代用品に。ラオス人がニンニク、バジルと炒めて食べるししみは、もちろん味噌汁にしても美味。ラオスのもち米とうるち米をブレンドして日本米の粘りを再現したご飯と合わせれば、食卓が一気に日本風になります。

日本のスーパーとは比べ物にならないほど食材の種類が豊富なラオスの市場。日本食と相性の良い逸品はまだまだあるはず。試行錯誤はつづきます。　（岩田 桃子）

— JVCラオスチームの会報から抜粋転載 —

出前講座

真光寺中「国際交流の日」にわくわく体験

コロナ禍の中、例年より遅れて11月に開催された町田市立真光寺中学校の恒例行事「国際交流の日」に参加しました。この行事は今年度で33回目。これだけ長く続いている同様の取り組みは全国でも例を見ないそうです。今回のスローガンは「One for the World～一人は世界のために～」。一人ひとりが世界に目を向けて現状を知り、みんなで何ができるのかを考える素敵なイベントです。生徒で構成される委員会、先生、そして保護者で運営されていて、その丁寧な取り組みに心を打たれました。

ビデオ出演したリタさん

地球の木が担当した1年生のテーマは、「アジアの国々を知ろう」。「私たちの身近な存在であるアジアの国々を、日本にいる外国人の方々を通して理解する」というものでした。

実施したのは「ネパールわくわくワークショップ」。地球の木のネパール人会員リタ・タパさんと一緒に参加する予定でしたが、リタさんは就職が決まり、参加できなくなりました。リタさんなしでワークショップをすることは魅力が半減してしまうと悩んだ末、リタさんには事前に撮っておいたビデオで出演してもらうことにしました。

このワークショップは、生徒たちにネパールの品物を班ごとに一つ選んでもらい、それが何に使うものかを考えるものです。水差し、識字教室の教科書、儀式に使うお皿など、ネパールの社会や文化をそこから学んでいきます。生徒たちは活発に意見を述べてくれました。その後リタさんがビデオで解説しました。生徒に語りかけるようなリタさんの言葉はまるでそこにいるかのような印象を与えたようです。最後に、「私にもみなさんと同じ位の歳の息子がいます。離れて暮らしていますが、早く一緒に遊びたい」と述べ、「コロナウイルスに気をつけて元気に勉強してください」と結びました。このビデオは今後も使っていきたいと思います。

（出前講座チーム　丸谷 士都子）

気仙沼だより その26

～東日本大震災から丸10年～

気仙沼と大島を結ぶ橋は完成、しかしかさ上げ工事は続く…

何度も気仙沼の報告を書いてもらったTreeSeed の小野寺大志さんの「10年と言われても、僕たちにとっては区切りや特別な年などではなく、復興途上のただの通過点にすぎない」という話を聞き、被災地の人たちの素直な気持ちを知ったおもいがしました。

10年前の3月、地球の木は震災の2週間後には緊急理事会を開き、地球の木としてできるだけの支援をすることを決めました。緊急支援をする中で、気仙沼の若者たちに出会い、彼らの活動を支援することになります。自分たちも被害を被っているのに地域の人たちのために懸命に働く彼らの姿に私たちは大きな感銘を受けました。そしてその後NPO法人 TreeSeed としてさまざまな活動を続ける彼らを見守ってきました。

「当時は何でもがむしゃらにやり、自分のできること以上のこともやろうとしていたが、少し落ち着いてからは何ができるかを考えるようになった」と代表を務めた高木裕治さん（現在、仙台在住）は振り返ります。そしてこの10年の変化として「今は、三陸自動車道が開通して仙台気仙沼間の行き来が楽になった」「新しくきれいな街に変わっていて知らない街に来たような感じになる。しかし人と話すと気仙沼だなぁ～と感じる」との感想も。またこの10年思い続けたこと、これから望むこととしては、「気仙沼のためになることがしたい、気仙沼の役に立ちたい」と同じ変わらぬ答えが返ってきました。

「気仙沼」―10年前まではほとんど縁もないという会員の方が多かったかも知れませんが、今はとても気になる場所になっているに違いありません。私たちは小野寺さんの「自分たちの活動を理解して伴走、相談、時には叱咤してほしいと思っています。これからも見守ってください」というメッセージ（2018年会報6月号に掲載）を大切にし、気仙沼をこれからもずっと気にかけていきます。

（会報作成チーム　沼田 由美子）

コラム　活動と運営の「オンライン化」進む

地球の木も、コロナ禍に対処するためにオンライン化を進め、軌道に乗せている。月1回の理事会をはじめ海外支援もオンライン会議システムにし、クラフト事業も初めてリモート仕入れを試みた。その様子をレポートする。

▶ネパールチーム

昨年3月にメンバー3人を現地に派遣する予定だった。しかし、海外渡航禁止発令で現地交流の見通しがつかない状態が続いていた。この間、メールなどで情報交換していたが、初めて現地のパートナーSAGUNとZoomによるオンライン会議を行った。6月のことだった。SAGUNもネパールチームも各自のパソコンなどで対応した。

その後10月には前プロジェクトのキーパーソンたちとオンラインで繋がることができた。その時の印象についてNさんは「会議ではネパール語を英語に、さらに日本語に訳す二重通訳。またネパール英語の発音が聞き取れず、後日再確認する手間もありましたが、とても有意義なものでした」。

▶クラフトチーム

初のリモート仕入れは昨年8月。地球の木事務所とカンボジアの首都プノンペンにいる現地連絡員ディナさんとつながった。

「渡航や移動時間の短縮、経費節約にもなりましたが、なんと言っても日本に居ながらにして仕入れが出来ることは大きな魅力でした」と担当スタッフのTさん。「私自身初めてのZoom操作で、ちゃんと映っているか、声が届いているかと心配しました。お店は市内にある4店。いずれも現地で購入していたNGOショップです」。また、約6時間にわたるパソコン画面を見ながらの仕入れについては、「バッグやスカーフなどの色合いや質感は実際に見るのとは微妙に違っているのでかなりの集中力が必要でした。通訳をしてくれたディナさんのスマホのバッテリーが切れるのではないかと気になりましたが、うまく切り抜けてくれました」。

▶会報作成チーム

会報発行はこれまでは全員が地球の木の事務所に集まり、作業をしていた。しかし、「3密」を避けることも考慮し、自治体の広い会場を借りたりもしていたが、今号ではオンラインでの編集作業を試みた。

このほか、地球の木講座や多文化共生の連続講座、ラオスの勉強会などもオンラインで行われたが「新たな人たちと繋がりができる」や「交通費や時間の節約になる」との反応があった。しかし外部では「オンライン会議導入など活動や運営のICT（情報通信技術）化普及率は4割程度で思ったほどではない」（通称みんかな・コロナ影響神奈川NPO等緊急アンケート結果速報版）との指摘がある。

（会報作成チーム　野崎 俊一）

地球の木と私　ネパールから来た1枚のはがき

2013年に地球の木でネパールの「マンガルタールともだちキャンペーン」がコーディネートされ、マンガルタール村近隣の高校生たちがお友達になろうよという絵はがきを書いてくれた。私も地球の木を通してサムジャナさんからのイラスト入り英語のはがきを頂いた。彼女の絵にはりっぱに茂った3本の木を背景に家やお寺らしき建物が描かれ、家の前の広場を2羽のかわいいにわとりが歩き回っていた。アジアのなかのネパールと日本。壮大な山岳地帯を背後に控えた坂の多い緑豊かな地域だと思う。サムジャナさん達はきっと丘を上り下りして学校に通いながら若者としての夢や未来を話し合っていたのだろう。8年後の今はどうしているだろう。2015年のネパール大地震を乗り超えて地区の新たなくらしを目指す原動力になっているに違いない。今も家の前には鶏たちがいて地区の皆さんが（多分マスクや距離をおくなどしながら）集まって喜びや悲しみを共有しているだろう。

日本では、みんなが新たな賑わいの形を期待しながらマスクで頑張る。ウイルスという自然に否応なしに対峙しながらこどもたちを育て地域のメンテナンスを話し合い生活を守る歩みが続く。地球の木がつなぐあちらとこちら。どちらも頑張れ。　（横浜市磯子区　片山 義）

サムジャナさんから届いたはがき

第22回 地球の木 総会のお知らせ

日 時 5月30日(日) 14:00～16:00

会 場 なか区民活動センター 研修室1

会場での出席とオンライン出席を併用しての実施を予定しております。会場でのご参加は人数が限られますことご了承ください。詳細は別紙の「第22回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

ご協力いただき ありがとうございました！

幸せ分かち合い年末募金

募金総額
1,251,450円

今年も会員の皆さまをはじめ、**130名**を超える方からご協力をいただきました。
皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

〈 寄付先別内訳 〉

・ネパール ..... 265,500円　・カンボジア 80,500円
・ラオス .....69,000円　・指定なし 836,450円

＊―― 2020年にいただいたご寄付の領収書を2021年1月28日に発送いたしました。 ――＊

地球の木カレンダー2021

壁掛け、卓上合わせて**519冊**ご購入いただきました。
カレンダーの収益は、地球の木の支援事業に使われます。
皆さまのご協力に心より御礼申し上げます。

地球の木クラフト オンライン販売のお知らせ
期間限定 3月31日(水)まで

2月20日(土)、「SDGｓよこはまCITYサイドイベント」(オンラインで開催)の中で地球の木はカンボジアのクラフトや現地の生産者について紹介しました。今回はオンライン販売もします。
＊会員の方には会員限定の通販カタログを同封しましたので、そちらもご覧ください。

活動日誌(12月～2月抜粋)

12月
3日　デポー展示会(つなしま)
19日　第8回定例理事会*

1月
23日　第9回定例理事会*

2月
13日　第10回定例理事会*
20日　「SDGsよこはまCITYサイドイベント」*
・カンボジアのクラフト生産者たちの紹介と販売
・第４回多文化共生の地域づくり講座
27日　第１回臨時理事会*

*はオンラインもしくはオンラインを併用して開催

編集後記

◆今回は初めてオンラインを利用して編集作業を行った。何とか無事に完成しホッとしている。私たちもやればできるのだと少し自信も。でも事務所に集まり一つのテーブルを囲み6～7人でワイワイやる編集作業はやはり魅力的。作業の合間のおしゃべりはいつも楽しくいろいろな情報を入手できるし、休憩タイムにいただく仲間の手作りのお菓子はとても美味。コロナが収束し、また顔を合わせてできる編集作業の日が早く来ますように　（Y.N）

特定非営利活動法人 地球の木 EARTH TREE